

足利高氏の役割

——『太平記』巻九の構成と展開——

谷 垣 伊 太 雄

一

京都（六波羅探題）と鎌倉（幕府）との崩壊によって、「平家九代ノ繁昌」は「一時ニ滅亡」する。それを、『太平記』は、巻九と巻十に分けて描く。巻九の章立ては次の通りである。

- 一、足利殿御上洛事
- 二、山崎攻事付久我駿合戦事
- 三、足利殿打越大江山事
- 四、足利殿着御篠村則國人馳参事
- 五、高氏被籠願書於篠村八幡宮事
- 六、六波羅攻事
- 七、主上々皇御沈落事
- 八、越後守仲時已下自害事

- 九、主上々皇為五宮被囚給事付資名卿出家事
- 十、千葉屋城寄手敗北事

第一章の冒頭は、巻八の第一章の冒頭と類似する。巻八の方は「先帝已ニ船上ニ着御」及びその優勢との情報に基づく六波羅の反応が描かれたのに対し、巻九の方は、「先朝船上ニ御坐有テ、討手ヲ被ニ差上、京都ヲ被ニ責由、六波羅ノ早馬頻ニ打テ、事既ニ難儀ニ及由、關東ニ聞ヘケレバ」という風に、情報が鎌倉に届いた結果としての北条高時による軍勢催促が描かれる。つまり、「六波羅」の「難儀」こそが巻八の要約であり、次の段階として鎌倉幕府へと叙述が移る事になる。

しかも、幕府全体の動きよりも、足利高氏という個人の動静が詳述され、結果的には、その事が幕府の崩壊を語るという展開を見せる。

「所勞ノ事有テ、起居未快ケル」中で上洛の催促を再三受けた足利高氏は憤懣を抱き「重テ尚上洛ノ催促ヲ加ル程ナラバ、一家ヲ盡シテ上洛シ、先帝ノ御方ニ參テ六波羅ヲ責落シテ、家ノ安否ヲ可_レ定者ヲ」と決心する。北条高時は「可_レ斯事トハ不_レ思寄」「一日ノ中兩度マデ」上洛を急ぎ立てる。「反逆ノ企、已ニ心中ニ被_レ思定テ」いた足利高氏は「不日ニ上洛可_レ仕」と返答する。

ところが、高氏が「御一族ノ郎從ハ不_レ及_レ申、女性幼稚ノ君違迄モ、不_レ殘皆可_レ有_レ上洛ト聞ヘ」たため、危惧した長崎入道円喜は北条高時の元に出向き「足利殿ノ御子息ト御臺トヲバ、鎌倉ニ被_レ留申テ、一紙ノ起請文ヲ書セ」という二つの条件を提言する。

高時からの使者に対し、高氏は「鬱胸弥深カリケレ共、憤ヲ押ヘテ氣色ニモ不_レ被_レ出」「是ヨリ御返事ヲ可_レ申」と答えて、使者を帰らせる。

相談を受けた弟の直義は「今此一大事ヲ思食立事、全ク御身ノ爲ニ非ズ、只天ニ代テ無道ヲ誅シ、君ノ御爲ニ不_レ義ヲ退ント也」として「此等程ノ少事ニ可_レ有_レ猶豫」アラズ。兎毛角モ相摸入道ノ申サシ儘ニ隨テ其不_レ審ヲ令_レ散、御上洛候テ後、大儀ノ御計略ヲ可_レ被_レ回トコソ存候へ」と意見を述べ、高氏は「此道理ニ服シ」て、「御子息千壽王殿ト、御臺赤橋相州ノ御妹トヲバ、鎌倉ニ留置奉リテ、一紙ノ起請文ヲ書テ」北条高時に送る。

高時は「是ニ不_レ審ヲ散ジテ喜悅ノ思ヲ成シ」高氏を招いて「様々賞翫」し、八幡太郎義家から北条政子に相伝されて北条家に所持されていた「御先祖累代ノ白旌」を「此旌ヲサ、セテ、凶徒ヲ急ギ御

退治候へ」と、餞別に送り、更に「飼タル馬ニ白鞍置テ十疋、白幅輪ノ鎧十領、金作ノ大刀一」を引出物として贈る。

こうして、足利兄弟・吉良・上杉・仁木・細川・今河・荒河をはじめとする三千余騎は、元弘三年三月二十七日に鎌倉を出立し、四月十六日に京都に到着する。

高時のことを「彼ハ北條四郎時政ガ末孫也。人臣ニ下テ年久シ」と見て「我ハ源家累葉ノ族也。王氏ヲ出テ不_レ遠」と自己認識したとは言え、足利高氏の「反逆」は私憤に近いものとして記されるため、「先帝ノ御方ニ參テ」という決心との間には懸隔が見られる。

ところが、長崎円喜の発案に基づいて北条高時から伝えられた二つの条件が、弟の直義の論証によってクリヤーされたときに、高氏の決心は足利氏、つまり源氏にとっての「大儀ノ御計略」となる。

第二章ではまず、巻八における京都の有様が要約される。「官方ハ負レ共勢弥重リ、武家ハ勝共兵日々ニ減ゼリ」という両六波羅不利の状況は、「足利・名越ノ兩勢又雲霞ノ如ク上洛」する事によって、六波羅方にとって好転するかに思われた。

しかし、足利高氏は「京着ノ翌日ヨリ、伯耆ノ船上へ潛ニ使ヲ進セテ、御方ニ可_レ參由」を伝え、後醍醐天皇からは「君殊ニ叡感有テ、諸國ノ官軍ヲ相催シ朝敵ヲ可_レ追討」由ノ諭旨」が下される。

「足利殿ニカ、ル企有トハ思モ」寄らない両六波羅と名越尾張守は「日々ニ參會シテ八幡・山崎ヲ可_レ被_レ責内談評定」を「一々ニ心底ヲ不_レ殘」尽して行なった。

れていた「御先祖累代ノ白旌」を「此旌ヲサ、セテ、凶徒ヲ急ギ御

四月二十七日、「名越尾張守大手ノ大將トシテ七千六百餘騎」が「鳥羽ノ作道ヨリ」発向。「足利治部大輔高氏ハ、搦手ノ大將トシテ五千餘騎」で「西岡ヨリ」発向。「八幡・山崎ノ官軍」側は、千種忠顕勢五百餘騎、結城親光勢三百餘騎、赤松円心勢三千餘騎が諸方に対陣する。更に「足利殿ハ、兼テ内通ノ子細有ケレ共、若特ヤシ給フ覽」と、坊門雅忠は「寺戸ト西岡ノ野伏共五六百人驅催シテ、岩藏邊ニ」向かった。

大手の大將名越尾張守は「搦手ノ大將足利殿ハ、未明ニ京都ヲ立給ヌ」との知らせを聞き「サテハ早人ニ先ヲ被懸ヌト、不_レ安思_レ」つて「サシモ深キ久我暇ノ、馬ノ足モタ、ヌ泥土ノ中ヘ馬ヲ打入レ、我先ニ」と進攻する。しかも名越は「元ヨリ氣早ノ若武者」だったので、「今度ノ合戦、人ノ耳目ヲ驚ヌ様ニシテ、名ヲ揚シズル者ヲ」と考え、「其日ノ馬物ノ具・笠符ニ至マデ、當リヲ耀カシテ」出立したため、「今日ノ大手ノ大將ハ是ナメリト、知ヌ敵ハ無_レク、敵からは「是一人ヲ打シ」と狙われた。しかし、「鎧ヨケレバ裏カ、スル矢モナ」く、「打者達者ナレバ、近付敵ヲ切テ落_レ」とし、「其勢ヒ參然_レ」としていたため、「官軍數萬ノ士卒」も「已ニ開キ靡キヌ」と思われた。

ところが、赤松の一族で「強弓ノ矢繼早、野伏戰ニ心キ、テ、卓宣公ガ秘セシ所ヲ、我物ニ得タル兵」の佐用左衛門三郎範家ノ一矢によつて名越尾張守は「眉間ノ眞中」を射られ即死してしまふ。そのため、「尾張守ノ郎從七千餘騎」は壊滅的敗走をする。

第三章。大手の名越勢が激戦をしていた頃、「桂河ノ西ノ端ニ下リ居テ、酒盛シテ」いた「搦手の大將足利殿」は、大手の敗北・大將の討死を聞くと「サラバイザヤ山ヲ越ン」と言つて、「丹波路ヲ西ヘ、篠村ヲ指テ」移動した。しかし、搦手勢の中にいた「備前國ノ住人吉十郎」「攝津國ノ住人奴可四郎」の二人は、足利高氏に「野心」ありと察知し、大江山から引返して六波羅に報告する。六波羅は、名越尾張守の討死に続いて、足利高氏の離反の報を受け落胆・動揺する。

第四章。篠村に陣取つた足利高氏が近国の勢を召集したところ、「其旗ノ文、笠符ニ皆一番ト云文字ヲ書タ」丹波の住人久下弥三郎時重が二百五十騎で馳せつけた。その紋は久下の先祖が頼朝から下賜された「由緒アル文」である事を高師直から聞いた高氏は「當家ノ吉例」と大いに喜ぶ。結局、軍勢は二万三千餘騎に達した。

「是ヲ聞テ」六波羅では評定を行ない、六波羅北庁を「御所ニシツラヒ」、光厳天皇達を移らせた。光厳天皇は「御治天ノ後天下遂ニ不_レ穩、剩百寮忽ニ外都ノ塵ニ交リヌレバ、是偏ニ帝徳ノ天ニ背キヌル故也」と嘆く。日吉・賀茂両社の祭礼も停止となり、「神慮モ如何ト測難ク、恐有ベキ事共也」と思われた。

「官軍ハ五月七日京中ニ寄テ、合戦可_レ有」と京都の西・南・北側から攻め寄せるとの情報が伝わり、東山道方面のみが残っているものの、山門の「野心」を考えると「六波羅ノ兵共」は、「上ニハ勇メル氣色ナレ共、心ハ下ニ仰天」という有様で、六波羅の館を中心

として城郭が築かれた。

第五章では、足利高氏の篠村出立が描かれる。五月七日寅刻に二万五千余騎で出立した高氏は「宜祢ガ袖振鈴ノ音」に惹かれて「何ナル社トハ知ネドモ、戰場ニ赴ク門出ナレバトテ、馬ヨリ下テ甲ヲ脱テ、叢祠ノ前ニ跪キ」武運を祈誓する。そこが「篠村ノ新八幡」と知った高氏は「サテハ當家尊崇ノ靈神ニテ御坐シケリ」と、願文を妙玄に書かせ、自ら「筆ヲ執テ判ヲ居給ヒ、上差ノ鎗一筋副テ、寶殿ニ」奉納する。「相順フ人々」も上矢を一本ずつ献上したので、矢は塚のように積み上げられた。

大江山の峠を越える時「山鳩一番飛來テ白旗ノ上ニ翻翻」したのを見て、足利高氏は「是八幡大菩薩ノ立翔テ護ラセ給フ驗也。此鳩ノ飛行シズルニ任テ可レ向」と命令を下す。鳩は「閑ニ飛デ、大内ノ舊迹、神祇官ノ前ナル榎木ニ」止まった。「官軍」が、「此奇瑞ニ勇デ、内野ヲ指テ」進軍すると敵兵は次々と降参し、「篠村ヲ出給シ時ハ、僅ニ二萬餘騎」(傍点筆者、以下同じ)だった軍勢は、「右近馬場」を通過する時には、五万余騎になっていた。

第六章は京都攻防戦。六波羅方は六万余騎を三手に分け、足利勢に対して神祇官前、赤松勢に対して東寺へ、千種勢に対して伏見の上へと、それぞれ配備した。

「内野」へは、巻八第三章に功名が描かれた「陶山ト河野」に「宗徒ノ勇士二萬餘騎ヲ副テ」派遣したので「官軍モ無_レ左右不_レ懸入、

敵モ輒不_レ懸出」矢合戦をして両軍は対峙していた。「爰ニ官軍ノ中ヨリ」「足利殿ノ御内」の設楽五郎左衛門尉がただ一騎で駆け出し、六波羅方の「五十計ナル老武者」斎藤玄基と対決、玄基を組み伏せたものの、最後は「互ニ引組タル手ヲ不_レ放、共ニ刀ヲ突立テ、同ジ枕ニ」死ぬ。次に「源氏ノ陣ヨリ」「足利殿ノ御内」大高二郎重成が駆け出し、「先日度々ノ合戦ニ高名シタリト聞ユル陶山備中守・河野對馬守ハオハセヌカ、出合給ヘ。打物シテ人ニ見物セサゼン」と呼びかける。陶山は急拠八条へ向かった後だったため陣にはいなかったが、河野對馬守通治は「元來タマラヌ懸武者」だったので、対決しようと進み出た。ところが、「河野對馬守ガ猶子ニ、七郎通遠トテ今年十六ニ成ケル若武者」が「父ヲ討セジトヤ思ケン」大高に立ち向かう。大高は河野七郎の総角をつかみ、鍔の笠符から「是モ河野ガ子カ甥歟ニテゾ有ラン」と考え、斬り捨てる。「最愛ノ猶子」を目の前で討たれた對馬守は大高に馳せ向かうが、ここからは集団戦となり、結局「源氏ハ大勢ナレバ、平氏遂ニ打負テ、六波羅ヲ指テ引退ク」結果となった。

東寺方面へは赤松円心の勢三千騎が押し寄せたが、「西ハ羅城門ノ礎ヨリ、東ハ八條河原邊マデ」嚴重な城郭整備となっていた。しかし、妻鹿孫三郎長宗が堀に飛び込んで渡り、堀を引き倒したのをきっかけとして、両軍激戦となり、「六波羅ノ勢一萬餘騎、七縱八横ニ被_レ破テ、七條河原」へ追い出された。

竹田方面でも、木幡・伏見方面でも敗北した六波羅勢は、六波羅の城に逃げ籠った。攻撃側の方は、「五條ノ橋ヨリ七條河原マデ」

を包圍したが、東一方だけはわざと開けておいた。これは「敵ノ心ヲ一ニナサデ、輒ク責落サン為ノ謀」であつた。

城側については、「六波羅ニ桶籠ル所ノ軍勢雖少ト、其數五萬騎ニ餘レリ。此時若志ヲ一ニシテ、同時ニ懸出タラシカバ、引立タル寄手共、足ヲタメジトミヘシカ共、武家可亡、運ノ極、メニヤ有ケン、日來名ヲ顯セシ剛ノ者トイヘ共不勇、無雙強弓精兵ト被云者モ弓ヲ不引シテ、只アキレタル許ニテ、此彼ニ村立テ、落支度ノ外ハ儀勢モナシ」と、滅亡を確実に予想する形で描かれる。しかも、「名を惜ミ家ヲ重スル武士共ダ、ニモ」この様な状況であつた上に、主上・上皇・女院達「軍ト云事ハ未ダ目ニモ見玉ハヌ」層を擁する而六波羅探題は「惘然ノ體」でしかなく、「城中ノ色メキタル様ヲ見テ、叶ハジト」思つ「今マデ無武者トミヘツル兵」達さえも「我レ先ニ」と落ちて行き、「義ヲ知命ヲ輕ジテ殘留ル兵」は「僅ニ千騎ニモ不足」という有様であつた。

もう時間の問題であつた六波羅の滅亡について、この章は〈へ負〉の表現（否定的表現）を多用しつつ、その内的崩壊状況を描いていく。そして、最後の抵抗になつたかも知れないにせよ、鎌倉幕府が嚴存している元弘三年五月七日の事として考えれば、右の引用文中の……線部分の仮定法は、六波羅探題にとつての最後の可能性を記したものであつたと言えよう。

第七・第八・第九の各章は、六波羅から差し伸べられた手が、鎌倉には届かぬままに断ち切られる最期の様子が描かれる。

まず、糟谷三郎宗秋が「千騎にタラス程」になつた現状で「大敵ヲ防ガシ事ハ叶ハジ」との判断に基づき「東一方ヲバ敵未ダ取マハシ候ハネバ（注・これは前章で見たように寄手側の「謀」であつた）、主上・々皇ヲ奉取テ、關東へ御下候テ後、重テ大勢ヲ以テ、京都ヲ被責候ヘカシ」と再三主張した事を、六波羅探題は「ゲニモ」として、まず女院・皇后達女性を脱出させる事を決める。

次に、六波羅北探題北条仲時が奥方と別れを惜しみ「遙ニ時ヲゾ移サレケル」という有様が、項羽・虞氏の中国故事に比して哀感をこめて描かれる。「泪ヲ落サヌ武士ハナシ」という場面は、南探題北条時益の「ナドヤ長々敷打立セ給ハヌゾ」の一言によつて、「鎧ノ袖ニ取着タル北ノ方少キ人ヲ引放シテ」出発する現実へと引き戻されるが、「是ヲ限ノ別トハ互ニ知ヌゾ哀ナル」との一文が、近い将来における最終的な幕の引かれ方を予告している。

仲時を促した北条時益自身は、京都を脱出してしまわぬ五月閏の「苦集滅道ノ邊」で、充満していた「野伏」達のために、首の骨を射られて落馬し絶命する。糟谷七郎は「泣々主ノ頸ヲ取テ錦ノ直垂ノ袖ニ裏ミ、道ノ傍ノ田ノ中ニ深く隠シテ則腹搔切テ主ノ死骸ノ上ニ重テ」死んだ。

六波羅を脱出した光厳天皇の一行も「落人ノ通ルゾ、打留テ物具剝」という声々と共に矢を射かけられ四散するが、「五月ノ短夜明ヤラデ、關ノ此方モ闇ケレバ、杉ノ木陰ニ駒ヲ駐テ」休憩中の「主上ノ左ノ御脇」に流れ矢が突き立ち、陶山備中守が「急ギ馬ヨリ飛下テ、矢ヲ抜テ御疵ヲ吸」う「淺猿カリシ」事件も起こつた。

更に夜が明けると、「北ナル山」に「野伏共ト覺テ、五六百人ガ程、楯ヲツキ鎌ヲ支テ待懸」けているのが見えた。行幸の前駆を務めていた中吉弥八が敵に近付いて「忝モ一天ノ君、關東へ臨幸成處ニ、何者ナレバ加様ノ狼籍ヲバ仕ルゾ。心アル者ナラバ、弓ヲ伏セ甲ヲ脱デ、可奉_レ通。札儀ヲ知ヌ奴原ナラバ、一々ニ召捕テ、頸切懸テ可通」と言い懸けたところ、「野伏共」は「カラ_レト笑テ」、「如何ナル一天ノ君ニテモ渡ラセ給へ、御運已ニ盡テ、落サセ給ハズルヲ、通シ進ラセントハ申マジ。輒ク通り度思食サバ、御伴ノ武士ノ馬物具ヲ皆捨サセテ、御心安ク落サセ給_レ」^(注2)と言つて関の声をあげた。中吉弥八は「惡ヒ奴原ガ振舞哉。イデホシガル物具トラセン」と若武者六騎で「慾心熾盛ノ野伏共」を駆け散らす「餘ニ長追シ」た中吉弥八は、野伏二十数人に取囲まれる。中吉は「少モヒルマズ」「其中ノ棟梁ト見ヘタル敵」と対決する。深田の中で、下に組み敷かれた中吉は、腰刀が抜け落ちて反撃できないのを知ると「刀加ヘニ、敵ノ小腕ヲト掬リスクメテ」、「我ハ六波羅殿ノ御雑色ニ、六郎太郎ト云者ニテ候ヘバ、見知ヌ人ハ候マジ。無用ノ下部ノ頸取テ罪ヲ作り給ハンヨリハ、我命ヲ助テタビ候ヘ、其悦ニハ六波羅殿ノ錢ヲ隠クシテ、六千貫被埋タル所ヲ知テ候ヘバ、手引申テ御邊ニ所得セサセ奉ン」と言う。すると野伏は「誠トヤ思ケン、抜タル刀ヲ鞘ニサシ、下ナル中吉ヲ引起シテ、命ヲ助ルノミナラズ様々ノ引出物ヲシ、酒ナンドヲ勸テ、京ヘ連テ上」った。中吉は「六波羅ノ焼跡」へ行き、「正シク此ニ被埋タリシ物ヲ、早人が掘テ取タリケルゾヤ。徳着ケ奉ント思タレバ、耳ノビクガ薄ク坐シケ

リ」と「欺テ、空笑シテ」引返した。

このような「中吉が謀ニ道開ケテ」光厳天皇は篠原の宿に到着。ただ、天台座主梶井二品親王は「行末トテモ道ノ程心安ク可_レ過共覺サセ給ハネバ、何クニモ暫シ立忍バヤ」と思ったものの、供奉する者が二人しかいないと聞き、「サテハ殊更長途ノ逆旅叶フマジ」と考え、「是ヨリ引別テ、伊勢ノ方ヘ」向う。「スハヤ是コソ落人ヨ」と分かる姿だったが「山王大師ノ御加護ニヤ依ケン、道ニ行逢奉ル山路ノ樵、野徑ノ蕪、御手ヲ引御腰ヲ推テ」無事ニ鈴鹿山を越える事ができた。伊勢の神官が「心有テ身ノ難ニ可_レ遇ヲモ不_レ顧、兎角隱置進セ」たので、「是ニ三十餘日御忍有テ、京都少シ静リシカバ還御成テ、三四年ガ間ハ、白毫院ト云處ニ、御遁世ノ體ニテゾ御坐有」ったという。

拡散する展開の中で、必ずしも纏めきれぬ場合があるにも拘らず、話題（話材）として採り上げた結果、ともかく小さな完結を示す形で語られるのが、この第七章と言えよう。例えば、光厳天皇の窮地を救う中吉弥八は、第三章に登場した中吉十郎と同じく「備前國ノ住人」と紹介されるが、野伏の棟梁を相手にしての言動は、むしろ頓智話・笑話への傾斜を見せている。それは、或る点では橋正成の「武略ト智謀」^(注3)に接点を持つが、「慾心熾盛ノ野伏」という現実的欲望を露呈する無名の集団を相手としての中吉弥八の「欺テ、空笑シテ」の非現実的対応で、果して野伏が納得し得たかどうかまでは語られる事はない。この場面では、野伏集団を目の前にして「是ヲ見テ面々度ヲ失テアキレタリ」という段階から、「主上其日ハ

テ取タリケルゾヤ。徳着ケ奉ント思タレバ、耳ノピクガ薄ク坐シケ

篠原ノ宿ニ着セ給フ」という状況変化へと繋ぐものとして、「中吉ガ謀」という一つの条件が導入されたと言えよう。

又、梶井二品親王、つまり光厳天皇の弟に当たる尊胤法親王が、天皇とは別の行動をとったという話題(話材)を採り上げた結果、「山王大師ノ御加護」による鈴鹿越え、「心有テ身ノ難ニ可^レ遇ヲモ」顧慮しない「伊勢ノ神官」の献身によつての伊勢滞在と京都への還御などが、時間を越えて、語られてしまふのである。

妻子との別れを惜しむ場面を中断させられる形で六波羅を脱出した、もう一人の六波羅探題北条仲時達の最期が描かれるのが第八章。

「兩六波羅京都ノ合戦ニ打負テ、關東へ被落」と知れわたつたため、街道沿いの近江の各地や伊吹山麓・鈴鹿河辺りの「山立・強盜・盜者共二三千人」が集結し、「先帝第五ノ宮^(注4)」を「大將ニ取奉テ、錦ノ御旗ヲ差擧ゲ、東山道第一ノ難所、番馬ノ宿ノ東ナル、小山ノ峯ニ取上リ、岸ノ下ナル細道ヲ中ニ來」んで待ち受けた。

一方、光厳天皇一行とともに篠原の宿を出発した北条仲時は、供奉の兵が二千騎から七百騎に足らぬほどに減つた中で、先陣に糟谷三郎宗秋、後陣に佐々木判官時信を配備して、番馬の峠にさしかかった。待ち構える数千の敵にむかつて、糟谷は「三十六騎ノ兵」で「一陣ヲ堅メタル野伏五百餘人」を追い上げたものの、晴れゆく朝霧の中に、「錦ノ旗一流」を靡かせた「兵五六千人」を発見、「兎ニ毛角ニモ可^レ叶トモ覺へ」なかつたため、麓の辻堂で「後陣ノ勢」を待った。

「前陣ニ軍有ト聞テ、馬ヲ早メテ」馳せつけた北条仲時に向かつて、糟谷三郎は、美濃の土岐一族・遠江の吉良一族らが關東への進路を遮断する形で応戦する可能性を訴え、「只後陣の佐々木ヲ御待候テ、近江國へ引返シ、暫サリヌベカランズル城ニ楯籠テ、關東勢ノ上落シ候ハズルヲ御待候ヘカシ」と提案し、仲時も佐々木について「今ハ如何ナル野心カ存ズラン」と思いつつも、糟谷の意見に従つて「時信ヲ待テコソ評定アラメ」として、五百余騎で辻堂の庭で待機する事にした。

ところが、約一里距離をおいて三百余騎で進んでいた佐々木時信は「如何ナル天魔波旬ノ所為ニテカ有ケン」北条仲時が番馬の峠で野伏達に取囲まれて全員討死した、と誰かに告げられた。そのため佐々木は「今ハ可^レ為様無リケリ」として、「愛智河ヨリ引返シ、降人ニ成テ京都へ上」つたのである。

越後守北条仲時は、時信を待ったものの「待期過テ時移」つたため「サテハ時信モ早敵ニ成ニケリ」と考え、潔く切腹する決心を固めた。そして、味方の者達に「武運漸傾テ、當家ノ滅亡ニ近キニ可^レ在ト見給ヒナガラ」行動を共にしてくれた事を感謝し、「自害ヲシテ、生前ノ芳恩ヲ死後ニ報ゼント存ズル也」「早く仲時ガ首ヲ取テ源氏ノ手ニ渡シ、咎ヲ補テ忠ニ備ヘ給ヘ」と言い終わらぬうちに「鎧脱テ押膚脱、腹搔切テ伏」した。これを見た糟谷三郎宗秋は、「涙をおさえながら「宗秋コソ先自害シテ、冥途ノ御先ヲモ仕ラント存候ツルニ、先立セ給ヌルコソ口惜ケレ。(中略) 暫御待候へ、死出ノ山ノ御伴申候ハン」と言つて、「越後守ノ、鞆口マデ腹ニ突立

て被置タル刀ヲ取テ、己ガ腹ニ突立、仲時ノ膝ニ抱キ付」(注5) いて俯伏せになって最期を遂げた。

以下、百五十七人の人名が列記された上で、「是等ヲ宗徒ノ者トシテ、都合四百三十二人、同時ニ腹ヲ切タリケル」と記され、凄絶な情景が短く描かれる。又、「主上・々皇ハ、此死人共ノ有様ヲ御覽ズルニ、肝心モ御身ニ不傍、只アキレテゾ坐シマシケル」と、先導者たる武士を失って、動けなくなつてしまつた光厳天皇達について、言及される。

第九章では、まず、「五宮ノ官軍共」が光厳天皇達を捕えて長光寺（武作寺）へ入れた事、主上自ら「三種神器并玄象・下濃・二間ノ御本尊ニ至マデ」を「五宮ノ御方へ」渡した事が記される。

又、「當今奉公ノ寵臣」日野大納言資名は「如何ナル憂目ヲカ見ンズラン」と「身ヲ危ブンデ」、その辺の辻堂にいた「遊行ノ聖」に出家の戒師を依頼し、出家に際して「四句ノ偈ヲ唱ル事ノ有ゲニ候者ヲ」と話しかけたところ、聖はその文を知らなかつたのか「如是畜生發菩提心」と唱えた。同様に出家しようとして髪を洗つていた三河守友俊は、これを聞き、「命ノ惜サニ出家スレバトテ、汝ハ是畜生也ト唱給フ事ノ悲シサヨ」と「エツポニ入テ」笑つてしまつた。

この挿話は、「遊行ノ聖」（無名の者）の無知さが日野資名の物差しで測られる部分については、第七章における野伏の棟梁（無名の者）と中吉弥八という人的対応に似るが、ここでは友俊の自嘲的な

笑いの中に、「命ノ惜サニ出家」する資名に対するアイロニーの視線をも見落す事ができない。

結局、供奉する者が、経頭・有光のみとなつた光厳天皇・康仁親王・後伏見上皇・花園上皇達は「見狎ヌ敵軍ニ前後ヲ被_レ打圍テ、怪ゲナル網代興ニ被_レ召テ」帰京する事となる。「見物ノ貴賤」は町辻に立つて「アラ不思議ヤ、去年先帝ヲ笠置ニ生捕進ラセテ、隱岐ノ國ヘ流シ奉リシ其報、三年ノ中ニ來リヌル事ノ淺猿サヨ。昨日ハ他州ノ憂ト聞シカド、今日ハ我上ノ責ニ當レリトハ、加様ノ事ヲヤ申スベキ。此君モ又如何ナル配所ヘカ被_レ遷サセ給テ宸襟ヲ被_レ惱ズラン」と「因果歴然ノ理ヲ感思シテ、袖ヲヌラ」した。これは、巻四第六章で、隱岐へと送られる後醍醐天皇を見送つた「京中貴賤男女」の「正シキ一天ノ主ヲ、下トシテ流シ奉ル事ノ淺猿サヨ。武家ノ運命今ニ盡ナシ」と泣き悲しんだ場面に対応するものでもある。

こうして、六波羅の滅亡を時間を追つて描いた後に、巻七に記されていた千劍破城の状況へと目を転じるのが第十章である。

「六波羅已ニ被_レ責落テ、主上・々皇皆關東ヘ落サセ給ヌ」との情報が届き、千劍破城の寄手十万余騎は奈良方面へと引き退く。ただ、「前ニハ兼テ野臥充滿タリ。跡ヨリハ又敵急ニ追懸ル」中の逃走であつたため、「殘少ナニ被_レ討成、僅ニ生タル軍勢モ、馬物具ヲ捨ヌハ無_レク、「サレバ今ニ至ルマデ、金剛山ノ麓、東條谷ノ路ノ邊ニハ、矢ノ孔刀ノ疵アル白骨、収ル人モナケレバ、苔ニ纏レテ墨々タリ」という有様であつた事が、時間の経過を含む形で描かれ

る。その様な状況の中で「宗徒ノ大將達ハ、一人モ道ニテハ不被
討シテ」奈良に逃がれ着いた。

二一

このように概観してくると、第一章から第六章までは、鎌倉幕府
の相模入道北条高時の傘下に属していた足利高氏が、後醍醐天皇方
に身を転じ、幕府の重要機関たる六波羅探題の打倒に加担する姿を
中心として展開する。「所勞」のため体調の良くない時に、上落せ
よとの北条高時からの「催促度々ニ及」んだ高氏は、「父ノ喪ニ居
テ三月ヲ過」ぎず「悲歎ノ涙未乾」という事と、「病氣身ヲ侵シテ
負薪ノ憂未休」という事とを察知しない高時に対して「憤思」い、
「遺恨ナレ」と思う。この私的憤懣が「時移リ事變ジテ貴賤雖易
位、彼ハ北條四郎時政ガ末孫也、人臣ニ下テ年久シ。我ハ源家累葉
ノ族也。王氏ヲ出テ不遠」という、源平対立の中で源氏優位と
の認識に結び付けられ、「先帝ノ御方ニ參テ六波羅ヲ責落」す事も
ありうるとの決意へと発展する。

鎌倉幕府にとっては、裏切りでしかない高氏の行動は、予見さ
れる要素があったからこそ、長崎円喜は二つの条件を出したのであ
った。これは高氏にとっても選択を迫られる場面であったが、「憤
ヲ抑ヘテ」弟直義の意見を聞き、直義が高氏の心中の決意を「大儀
ノ御計略」と定義づけたために、高氏は鎌倉幕府に対して直接反旗
を翻すという、破壊の可能性を含む選択を捨てることができた。起請

文はともかく、妻子を鎌倉に留め置くとの条件は、高氏の決心を購
踏させるものであったかも知れないが、妻登子が執権赤橋守時の妹
である事を含めて、直義が「大儀ノ前ノ少事」と断言するだけの勝
算があつて、受諾し得たのであろう。従つて、高氏の「裏切り」に
ついての代償は、たとえば、巻十において赤橋守時の自害によって
贖われる事となる。

「先帝」の隠岐脱出によつて、「官軍」は、後醍醐天皇を頂点とす
る富士山型三角形の裾野部分に公家・武士が並列する様相を示しつ
つあつた。そこへ、高氏が加わる事は、「官軍」の安定感を増すと
ともに、幕府方を足元から突き崩す事に繋がる。ただ、幕府方が条
件を付けた事でもわかるように、官軍側にとつても高氏を「兼テ内
通ノ子細有ケレ共、若特ヤシ給フ覽」と、一応警戒して、坊門雅忠
が野伏五六百人をかり集めて、正式には六波羅の「搦手ノ大將」で
あつた高氏軍の方へ向かつた。

大江山を西へ越える事で態度を鮮明にした高氏が、篠村で軍勢を
召集した時、旗・笠符に「一番」という文字を書いた久下弥三郎時
重が二百五十騎で一番に馳せつけた事、その家紋が、頼朝の土肥で
の挙兵の際の一番乗り縁を持つ事を高右衛門尉師直から聞いた事
は、今後の高師直の役割とともに注目して良い。「サテハ、是ガ最初
ニ參リタルコソ、當家ノ吉例ナレ」との高氏の言葉通りに「二萬三
千餘騎」の軍勢が集結した、という風に叙述される。これは、篠村
の宿を出発した高氏が下馬をして拝礼をした神社が実は「篠村ノ新
八幡」であると聞き、「サテハ當家尊崇ノ靈神ニテ御坐シケリ」と

言つて高氏が戦勝祈願の願書を奉獻した話にも重なり、更に、大江山を越えて京都に入る時に山鳩が飛来して白旗の上で舞つたのを見て高氏が「是八幡大菩薩ノ立羽ヲ護ラセ給フ驗也。此鳩ノ飛行ノズルニ任テ可_レ向」と命令した奇瑞譚も記される事となる。そのため、決して少ないとは言えぬ「二萬餘騎」という数字さえも、「足利殿篠村ヲ出給シ時ハ、僅ニ二萬餘騎有シガ、右近馬場ヲ過給ヘバ、其勢五萬餘騎ニ及ベリ」という文脈で語られるのである。

こうして六波羅攻めに加つた足利高氏だが、高氏自身が合戦場面において華々しい活躍を見せるわけではない。むしろ、彼の場合、「平氏（北条氏）」を倒すためのシンボルたりうる存在としての「源氏」の頭領という役割を担つての登場であつたと言えよう。

たとえば、呼称について見てみると、巻九全体で次の様になつてゐる。^(注7)

- A、足利治部大輔高氏…………… 2
- B、足利治部大輔高氏朝臣…………… 1
- C、源朝臣高氏…………… 1
- D、足利殿…………… 23
- E、足利…………… 1
- F、高氏…………… 2

右のうち、Cは願書の署名。Fのうち一例は願書の中の一人称としての使用例、もう一例は第一章で「条件」を承諾した高氏について「相摸入道是ニ不審ヲ散ジテ喜悅ノ思ヲ成シ、高氏ヲ招請有テ」という箇所。Eは第二章の「足利・名越ノ兩勢又雲霞ノ如ク上落シ

タリケレバ」という箇所。Aは第一章の「足利治部大輔高氏ハ、所勞ノ事有テ」と第二章「足利治部大輔高氏ハ、搦手ノ大將トシテ」。Bは第五章「明レバ五月七日ノ寅刻ニ、足利治部大輔高氏朝臣、二萬五千餘騎ヲ率シテ、篠村ノ宿ヲ立給フ」という箇所。Dのうち一例は第一章で長崎入道円喜が北条高時に進言する会話の中で使用されたもの、又、別の二例は、第六章の中で、設楽五郎左衛門尉と大高重成とが名乗りの場面で「足利殿ノ御内ニ」として使用するもの。

京都へ派遣された「大手ノ大將」名越尾張守高家の呼称が「名越尾張守」か「尾張守」であり、北条高時の呼称が「相摸入道」であるのと比しても、やはり、「六波羅ヲ責落」す役割を担つた足利高氏の人物形象についての作者の「思い入れ」を看取しうる。

次に、第七章から第九章について見ると、「六波羅探題」の範囲に限定しても、鎌倉幕府側の内面的な亀裂が窺える。すなわち、六波羅探題にとつての光厳天皇をはじめとする皇族や公卿達は「軍ト云事ハ未ダ目ニモ見玉ハヌ」存在でしかなく、官軍側における後醍醐天皇のような存在感を持ち得ない。^(注8)そのため、第七章で矢を受け負傷した光厳天皇のことを、介抱した陶山備中守の目を通して「見進ラスルニ目モアテラレズ」と描き、「忝モ萬乗ノ主、卑匹夫ノ矢前ニ被_レ傷テ、神龍忽ニ釣者ノ網ニカ、レル事、淺猿カリシ世中也」とは記すものの、同情を込めた慨嘆的文調とはならず、第八章における六波羅勢の多数の自害場面においても、「主上・々皇ハ、此死

という箇所。Eは第二章の「足利・名越ノ兩勢又雲霞ノ如ク上落シ

人共ノ有様ヲ御覽スルニ、肝心モ御身ニ不_レ傍、只アキレテゾ坐シマシケル」と描かれるのみであって、存在感の上で武士達との懸隔が見られる。

又、鎌倉と共同戦線を組む事によって、唯一の活路を開き得たかも知れぬ五万騎に余る六波羅勢について、それを率すべき南探題北条左近将監時益と北探題北条越後守仲時との間には、緊密な協力態勢が見られない。妻子と別れを惜しむ仲時を急ぎ立てた時益は、野伏の矢によって呆気ない最期を遂げる。一方、仲時は「一家ノ運已ニ盡ヌ」と限界を確認し、「軍勢共」への感謝を表明した上で「腹搔切テ」死んでいく。兩人ともに「糟谷七郎」と「糟谷三郎宗秋」という忠義な家来が後を追うという類似点をもって描かれるが、対照的な点も持った兩人の死によって、京都（六波羅）と鎌倉との合體は実現せぬままとなってしまふ。しかも、六波羅から鎌倉へと伸ばされた手を直接断ち切る役割を担ったのは、巻七以来、随所に登場する無名の野伏達^(注10)であった。つまり、巻九における「官軍」は、この野伏達から足利高氏までを包含する、それ自体に問題を持った集団の力によって、一つの勝利を獲得したのである。

しかも、第十章「千葉屋城寄手敗北事」に楠正成の名を出さぬ形で、六波羅を中心とする近畿圏での関東方の敗北を大きく概観するとともに、巻九全体の中で、幕府方から天皇方へと振幅する動きを見せた「足利殿」の存在を鮮明に刻し、その事がやがて、建武新政後の足利高氏の役割をも予見させる構成を作り上げている。

注

(1) 引用は日本古典文学大系本(岩波書店)による。

(2) この場面における野伏達の言葉は、巻23「土岐頼遠参合御幸致狼籍事村雲客下車事」において、光厳上皇の還御に出会った土岐頼遠が「如何ナル田舎人ナレバ加様ニ狼籍ヲバ行迹ゾ。院ノ御幸ニテ有ゾ」という随身の言葉に対して「カラノト打笑ヒ、『何ニ院ト云フカ、犬ト云カ、犬ナラバ射テ落サン』ト云儘ニ」狼籍を働いた場面へと連接するものである。

(3) 巻三・笠置における後醍醐天皇への正成の言葉の中で使われている。

(4) 先帝(後醍醐)の第五皇子ではなく、五辻兵部卿親王宮(龜山天皇の皇子、四品兵部卿守良親王が正しい)。

(5) 第八章後半部に関しては、『鑑賞日本の古典・太平記』(鈴木登美恵・長谷川端 尚学図書)において、鈴木氏が、『太平記』執筆の材料と考えられる『近江国番場宿蓮華寺過去帳』と近江佐々木氏との関係等について詳述しておられる。

(6) 注(5)の書において、鈴木氏は「命惜しさに出家する資名と、従容として死の座に臨む資朝と、その対比的な兄と弟の姿は、実は、陰画と陽画の如く、一つの間像の裏表として把握できるのではないだろうか」と分析しておられる。

- (7) 章段の題名を除き、本文中の用例のみ。
- (8) 第三章で高氏の行動に疑惑を感じた中吉・奴可は、高氏を「此人」と言い、中吉は名越尾張守のことを「名越殿」と言っている。
- (9) 卷二と卷三における後醍醐天皇の虚像から実像への変身については、拙著『太平記の説話文学的研究』（和泉書院）第二章でも言及した。鈴木氏は、注(5)の書において、光厳天皇・両上皇と後醍醐天皇との対比的な描き方を指摘しておられる。
- (10) 「無名」という事については、拙稿『『太平記』卷七の構成と展開』（『樟蔭国文学』27号）参照。